

丹波佐吉狛犬の再整理

— 付阿波神社奉納時期についての考察 —

磯 辺 ゆ う

奈良文化女子短期大学

Re-arrangement of the Stone Komainu Series Made by Sakichi of Tanba — With a Discussion on the Unknown Dedication Time of Awa —

Yu Isobe

Narabunka Women's College

丹波佐吉の狛犬の中で、奈良県斑鳩町阿波神社狛犬の奉納時期は不明であった。本狛犬は、様式上佐吉の第Ⅳ期にあたるが、銘の字体、体型他により第Ⅱ期の斑鳩町興留・素戔鳴神社の後と考える。佐吉の狛犬を最初にまとめた際奉納順に番号をつけたが、阿波神社は時期不明のために最後の番号とした。その後狛犬が3件追加され、また阿波神社の時期が推定されたことにより、番号が錯綜してきた。狛犬制作の流れを整理し直すために、今回新番号を提案する。その上で佐吉の狛犬の様式の流れと第Ⅳ期について再度考察する。

キーワード：石造狛犬、丹波佐吉、江戸時代、斑鳩町、阿波神社

1. はじめに

筆者は幕末期の名人石工丹波佐吉の狛犬について、その形態を記載し、制作事情等について考察してきた^{1)~7)}。わかりやすくするために、最初にまとめて番号をつけて以来、新たに3件が追加され、計20件が知られるに至った。その中で奈良県斑鳩町阿波神社の狛犬だけは、奉納年が台座に記載されていた痕跡があるものの、破損し時期不明の状態であった。今回その時期の推定を行い、全体を再整理することにした。上記狛犬3件の追加と今回の阿波神社の途中挿入により、従来の番号では錯綜して混乱をきたすことになってきたので全体の番号の変更、様式の見直しを行った。

結論づけた順番で、全ての狛犬の写真を付図としてつけた。狛犬全体の様式の変化を改めて確認し、特に第Ⅳ期について考察を加える。

2. 新狛犬番号

従来の狛犬番号は、佐吉の頭文字のS + 数字としてきたが、新たな番号は、丹波佐吉の頭文字からのTS + 数字とし表1に示した。阿波神社狛犬については、次項以下においてその奉納時期を推定していくが、表1はその結論から作成している。次項以下の推定作業の中でも、阿波神社狛犬も含めて、混乱を避けるために新番号を用いることにする。

なお、筆者は先行論文⁷⁾において、東近江市佐野町天神社狛犬の台座と狛犬は時期が異なるものとし、現存の狛犬は摩気神社と合わせて佐吉最後の第Ⅴ期に入ると結論づけた。そこで、新番号では佐野町天

表1 狛犬番号と奉納年月及び推定製作場所

期	新狛犬番号	旧狛犬番号	神社	奉納年月	西暦	推定製作場所
?	TS1	S0	佐野・天神社	弘化4年11月	1847	現地?
第Ⅰ期	TS2	S1	平井・八王子神社	嘉永5年9月2日	1852	宇陀市
移行期	TS3	S2	丹生川上神社	嘉永6年11月	1853	
第Ⅱ期	TS4	S3	神楽岡神社	嘉永7年4月	1854	
	TS5	S4	宇太水分神社	嘉永7年9月	1854	
	TS6	S5	久米御懸神社	安政2年11月	1855	
	TS7	S17(S5-S6)	醍醐・春日神社	安政3年11月	1856	
帰郷						
	TS8	S6	興留・素戔鳴神社	安政4年9月	1857	大阪市
第Ⅳ期	TS9	S15	阿波神社	破損		
移行期	TS10	S7	藤森・十二社	安政5年12月	1858	
第Ⅲ期	TS11	S8	伴堂・杵築神社	安政6年4月	1859	
	TS12	S9	下永・八幡神社	安政6年9月	1859	
	TS13	S10	永原・御霊神社	安政7年・万延元年3月	1860	
	TS14	S19(S10-S18)	西・蛭子神社	万延元年9月	1860	
第Ⅳ期	TS15	S18(S19-S11)	八滝・五社神社	万延元年	1860	
第Ⅲ期	TS16	S11	柏原・八幡神社	文久元年5月	1861	
第Ⅳ期	TS17	S12	沢・白山神社	文久元年12月	1861	
	TS18	S13	兵主神社	文久2年11月	1862	
	TS19	S14	神岳神社	文久3年9月	1863	
病気						
第Ⅴ期	TS20	S0	佐野・天神社	不明		京都市又は現地?
	TS21	S16	摩気神社	不明		現地(南丹市)
帰郷						

注) 「推定製作場所」と「帰郷」、「病気」は磯辺^{2)、3)、4)、7)}をもとにした。

神社の最初に奉納されたであろう狛犬（台座が残る）を TS 1 とし、現存している狛犬を TS20とする。そのため、狛犬は全部で21番までである。表中の「期」については次項において記述する。

3. 狛犬の様式（期）と尾の形態

佐吉の狛犬は奉納時期と形態から大きく5様式（期）に分かれている（表1、表2）。最初に分類した時、尾の様式は、奉納時期の順番と一致していたため「期」と名付けた^{1)、2)}。しかし、第Ⅲ期最後の TS16柏原・八幡より前に奉納されている「第Ⅳ期」TS15八滝・五社が発見され、この部分で順番が入れ違いになった。そのため狛犬の様式を「期」と呼ぶよりは、「型」と呼ぶべきかもしれないが、混乱を避けるためと、言いやすさのためにこのまま「期」と呼ぶことにする。

また従来移行期を特に設けていなかったが、形態の変化の流れがより分かるように、ここでは移行期を設けた。以下に各期の特徴を述べる。特徴の詳細は表2及び磯辺^{1)、2)、4)、5)、6)}を参照されたい。

表2 佐吉狛犬の特徴

新狛犬番号	旧狛犬番号	期	尾	顔向き	目鼻間	顎鬚	鬘	流れ	方向	耳	胸のすじ	犬歯	胸紋	背骨紋	後脚後方渦	
TS1	S0															
TS2	S1	I	0		長		前	前				1	無			
TS3	S2	移行期					前	前		平			阿			
TS4	S3						前	前								
TS5	S4						前	後								
TS6	S5	II	Y	斜め こちら 向き	中	短	前	後						菊	0	
TS7	S17(S5-S6)							前	後					阿		
TS8	S6							前	後		有	2				
TS9	S15	IV	YU				中	前	後							
TS10	S7	移行期	Y					後	後	流れ				阿	?	
TS11	S8						後	後						菊	1	
TS12	S9						後	後						菊	0	
TS13	S10	III	H				後	後						丸	1	
TS14	S19(S10-S18)				短		後	後						菊	0	
TS15	S18(S19-S11)	IV	YU			長	後	後						丸	0	
TS16	S11	III	H				前	前		平		1	無		2	
TS17	S12						後	後	流れ					菊	0	
TS18	S13	IV	YU				前	後	平					?	1	
TS19	S14						後	後	平						0	
TS20	S0	V	0		長	短	前	後	平		有	2		菊	2	
TS21	S16			阿	正対	中	前	前								

注1 尾の型 O：扇、Y：ヤツデ、H：炎流れ毛、YU：ヤツデ渦

注2 TS11 (S8) の背、脚等に多数の菊紋があるが、胸にはない。

注3 ?は平成作には無いが元来は不明。

注4 TS1 (S0) は全て不明

注5 磯辺⁷⁾表3を改変

(各特徴の詳細は磯辺²⁾を参照)。

中でも重要な特徴である尾の形態を様式（期）別に図1、図2、図3に示した。第Ⅰ期の尾は上向きに直毛束が3束あり、横に大きめの渦毛がかたまっている（図1）。これを扇型とする。体型は縦長でかなり胸を張っており、鬘の毛束は前に流れる（付図1）。鬘の直毛束の中の筋は2本と少ない。顔も目鼻間が長くリアルな印象で、磯辺⁷⁾で考察したように木造の狛犬の特徴を濃く残しており、それらを参考にしたことがうかがえる。佐野町天神社の最初の狛犬 TS 1 がどのようなものだったかは分からないので、今のところ第Ⅰ期に属するのは TS 2 平井・八王子のみである。

次に来る TS 3 丹生川上は、尾を見ると渦毛が細かく多くなり、複雑になっているが、全体のイメージは第Ⅰ期に近い（図1）。上向きの直毛束があり全体は扇型である。一方、鬣の毛束の中の毛筋が多くなり、体型（ずんぐり）と顔（獅子頭風）が第Ⅱ期に近い（付図1）ので、従来第Ⅱ期に入れていた。ここではⅠ - Ⅱの移行期とする。

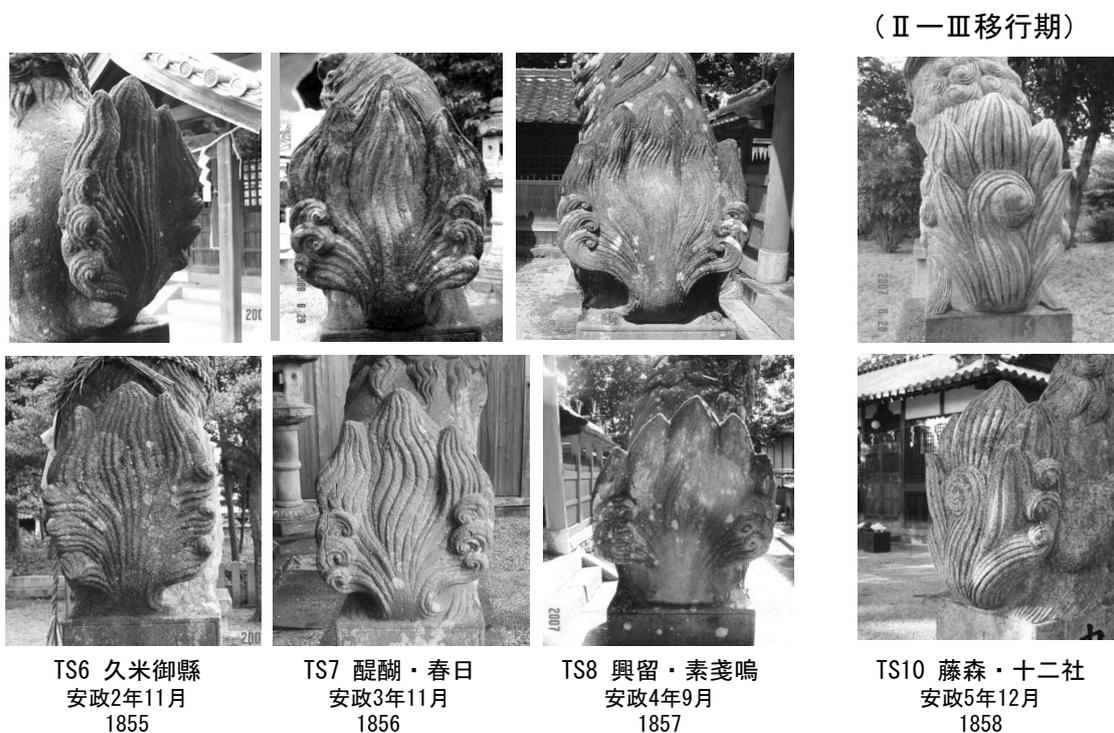
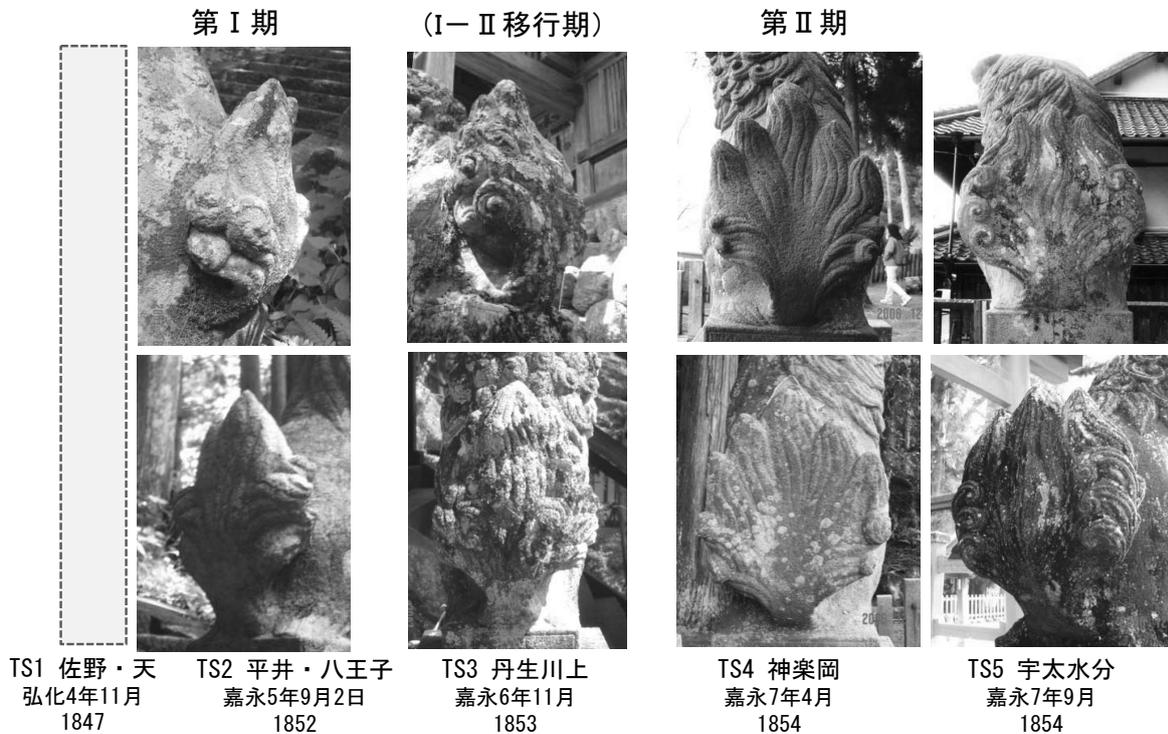


図1 第Ⅰ期からⅡ-Ⅲ移行期までの狛犬の尾と奉納年月 上段：阿、下段：咩
TS 1 佐野・天の初めの狛犬は不明なので [] としている。

第Ⅲ期



第Ⅳ期

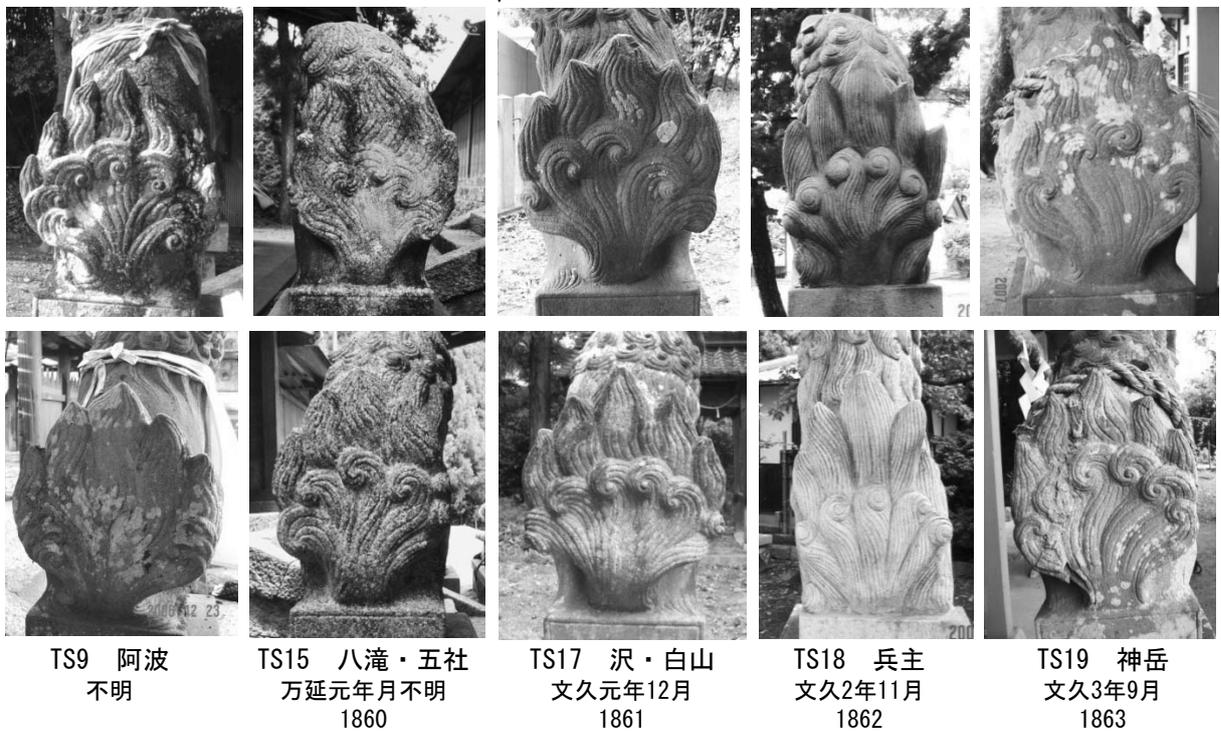
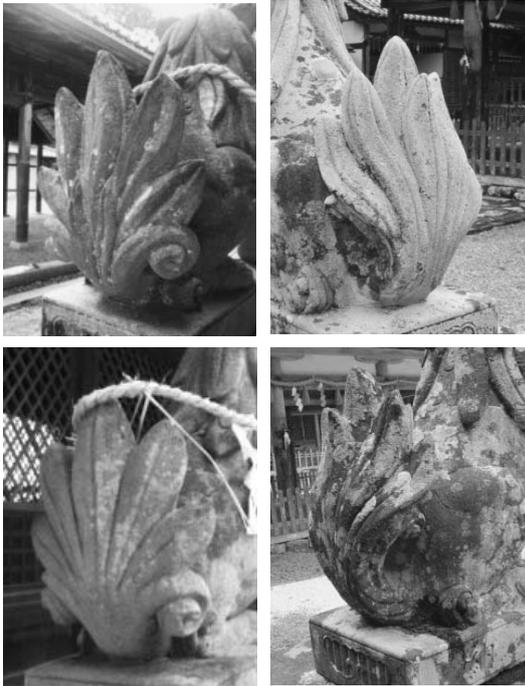


図2 第Ⅲ期と第Ⅳ期の狛犬の尾と奉納年月 上段：阿、下段：吽
TS16柏原・八幡は TS15八滝・五社の後に奉納されている（矢印）が、尾の様式は第Ⅲ期である。

第V期



TS20 佐野・天
不明

TS21 摩気
不明

図3 第IV期の狛犬の尾と奉納年月
上段：阿、下段：吽

第II期の狛犬の典型的な特徴は平らなヤツデの葉状の尾である(図1)。先の狛犬2件と比べると、尾の毛束の先が円弧状に大きく広がって、全体に平たい。第II期の中では尾の全体像は良く似ているが、細かい部分で工夫がある。体型、顔はいずれも良く似ている(付図1、付図2)が、この期の最高峰は最後に来る非常に力強い仕上がり of TS 8 興留・素戔鳴である。勢いがあり、拝観者の方にせり出してくる。この頃までは狛犬の全体像が若々しい。

次のTS10藤森・十二社の尾は縦に長くなっている(図1)。これは再建されているので実際の姿は不明である。従来は、直毛束の先が分かれて広がっているので第II期のヤツデタイプに入れていた。しかし、ヤツデタイプとは異なる点もある。それは中央渦毛に加えて直毛束の中に、前後に重なっているものがあることである。この再建狛犬は、胸紋や耳の形(付図2)など細部をよく再現していると考えられ、尾の毛束の特徴は佐吉の元来の狛犬も確かにそうだっただろうと推測される。

つまり、佐吉はヤツデの葉状の尾から抜け出て異なる方向に行こうとしているのである。その他の特徴でも、目鼻間は短くなり、顎鬚は中程度に長くなり、何よりも鬣の流れる方向が阿吽とも後向きになる(表2)。いずれも次のステップへの移行期と考えると分かりやすい。

第III期の尾は、かなり縦長で、炎状あるいは流れ毛状のものである。炎状の尾の直毛束の先は一つに収束している(図2 TS11、TS13)。流れ毛タイプでは、毛先は前に流れる(図2 TS12、TS14、TS16)。TS14西・蛭子では、この期の最後の到達点であるTS16柏原・八幡の尾に近づいている。体型は、この期の前半ではかなり縦長であるが、後半では落ち着いてくる(付図2、付図3)。目鼻間は短く、顎鬚が長くなり全体に老成した感じになってくる。特に鬣の流れ方向がいずれも阿吽とも後方向で一致している(表2)。

第IV期の尾の特徴は、全体として第II期のヤツデの形をとりながら、尾の後面に半円状に渦巻き毛をもっていることである(図2)。TS18兵主の尾は他のものより縦長であるが、これは再建された時にそのようになったと考えられる。奈良文化財同好会の報告⁸⁾中にある写真では、本来他のものと同様に丸い形をしていたと見える。尾後面の渦巻き毛の半円状配置については、再建狛犬でよく再現されているようである。

第V期は、尾も体形も全く異なる形状である。尾は木造狛犬の尾に近く、直毛束の毛筋は1本である。鬣も長くやはり直毛束の毛筋は1本である(図3)。さらに、目鼻間が長く、顔、脚ともにリアルで、

特に前脚には動きがある（付図5）。

これらの中で、時期不明の阿波神社の狛犬は、尾から明らかに第Ⅳ期のグループに入る（図2）。ただ、阿にのみ第Ⅳ期の特徴があり、呷では第Ⅱ期の尾と同じで、特にTS 8 興留・素菱鳴のものと同様である。第Ⅳ期の他のものは阿呷とも半円状の渦毛配置があるので、阿波神社狛犬はこのグループの中では一番早いものとみなすことができる。奉納時期としては、TS15八滝・五社（万延元年1860）より早く、後面に渦毛の半円状配置をもたないTS 8 興留・素菱鳴（安政4年9月 1857）より後と見ることができる。

4. 銘の中の「信」と花押

佐吉の銘の「信」の文字には明らかに時期的な方向性があることが、筆者による前の論文⁷⁾で見え

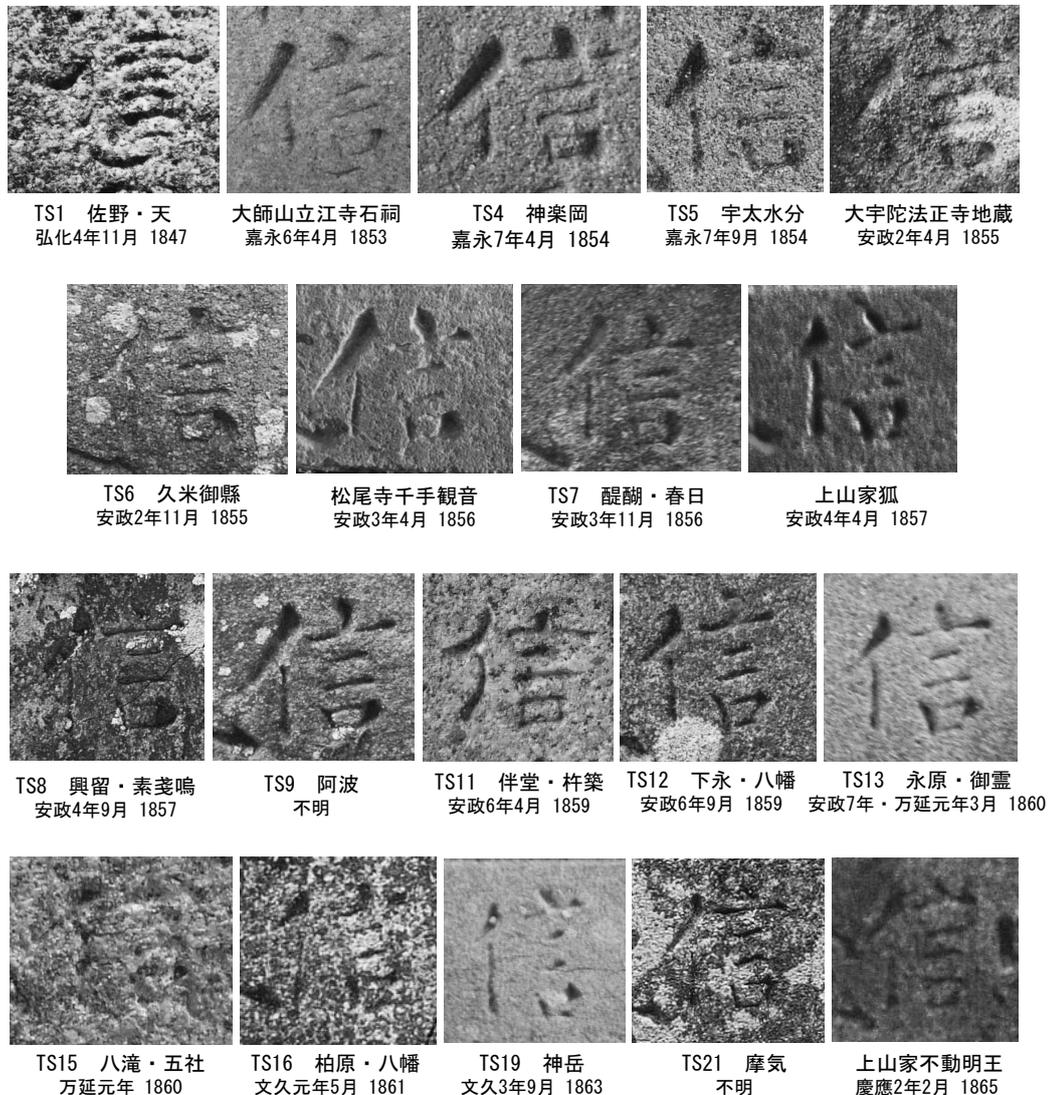


図4 佐吉の銘の中の「信」

銘のある狛犬とその他の石造物のものを奉納順に並べた（磯辺⁷⁾の順番を入れ替え、松尾寺千手観音追加）。文字が小さ過ぎる、写真が撮りにくい場合は省いた。阿波は推定位置である。

てきた。そこで、今回、字体の異なるものも合わせて、奉納の順番に並べてみた（図4）。さらに仲氏により報告⁹⁾されながら、広く知られないままだった奈良県大和郡山市松尾寺の千手観音を追加した。この石像については最近改めて報告されている¹⁰⁾。安政三年四月（1856）の奉納で、TS 6 久米御縣とTS 7 醍醐・春日の間に入ってくる。

「信」の人偏の払いと縦棒の長さが注目できる部分である。全体の傾向として奉納年月が下るにつれ、明瞭に払いが長い状態から短くなっていく。ただし、追加した松尾寺千手観音の「信」はもう少し前の図4一段目のグループに近く、全体の流れから少しずれている感じがある。それを除くと、人偏の払いが短くなるという傾向は、狛犬の様式とは一致せずに行進する。また佐吉が一生の中で、最も力を入れたと思われる狛犬は、TS 8 興留・素戔鳴神社、TS16 柏原・八幡、TS21 摩気であるが、「信」の文字の特徴はそのこととも関わりなく変化していく。時期そのものと関係があり、佐吉の年齢に関わる文字の変化であると考えられる。

問題の阿波神社の「信」は力強い。狛犬そのものは比較的軽く作っているように見えるが、文字に勢いがあり、力が漲っている。図4の中ではTS 8 興留・素戔鳴のすぐ後に置くのがよさそうである。TS 8 興留・素戔鳴の「信」の写真はやや見にくいですが、阿波神社のものと大きく異なる。

次に銘の最後にある花押を並べてみよう。図5の第一段目のグループは大変横長である。このグループは銘が縦書きであるために、最後の花押が扁平になっているのである。二段目のTS 5 宇太水分から

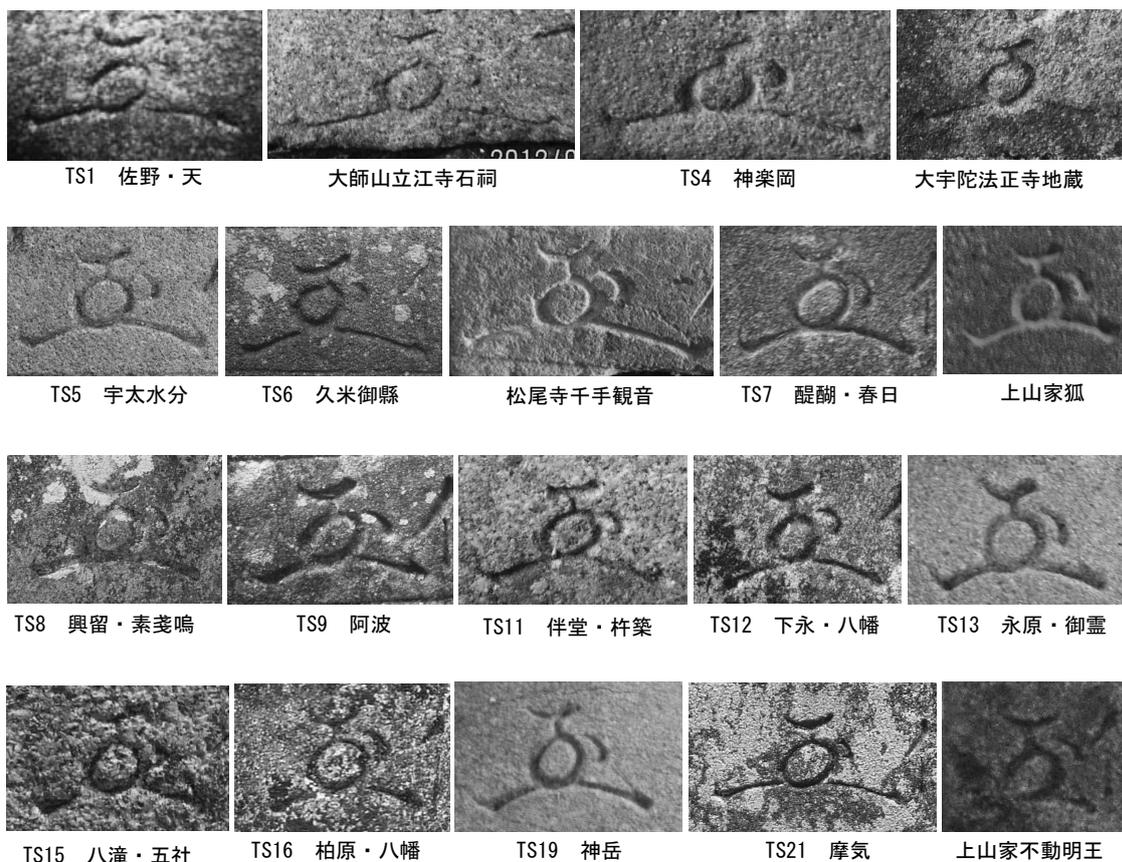


図5 佐吉の銘の中の「花押」

銘のある狛犬とその他の石造物のものをほぼ奉納順に並べた。第一段目は銘が縦書きのもの、第二段目以降ではTS11 伴堂・杵築以外は横書きである。そのため、大宇陀法正寺地藏とTS5 宇太水分の奉納順番が逆になっている。その他は図4の通りである。

上山家狐までは、松尾寺千手観音を除いて、徐々に横幅が小さくなっていく。その後は、縦書きの TS11 伴堂・杵築でも特に横長になることはない。ここでも松尾寺千手観音の花押は銘が横書きにも関わらず横長で、全体の流れから外れて第一段目のグループに近い。佐吉の銘は縦書きから横書きに変わるが、従来知られていた中で最初の横書きである TS 5 宇太水分よりも早く作られていた可能性も考えられる。この点は今後の課題である。

そのことはさておき、阿波に関して注目すべきところは、花押の上の横棒から中央の円部分に縦に入るところである。TS 8 興留・素戔鳴と阿波では縦棒は左下に流れ、その他の場合は全てほぼ縦に下りる。全体の印象も TS 8 興留・素戔鳴と阿波には柔らかな感じがある。その他のものはいずれも、下の横棒の勢いが様々であるが、円の上の縦棒がまっすぐに下りている部分できちんとしたイメージを与える。ここからも阿波はやはり TS 8 興留・素戔鳴と並ぶ時期に作られたと考えたい。

5. 前脚

前脚の作りにも時期的な変遷がある。図6に全ての狛犬の前脚を並べた。見やすい写真を採用したので阿吽が混じっている。

だまかに見ると、図6の最初から2段目の最後の TS14 西・蛭子までいかつい脚で、骨ばって筋肉質である。ところが、次の TS15 八滝・五社から柔らかな脚つきで、全体に丸い感じである。特に脛は骨

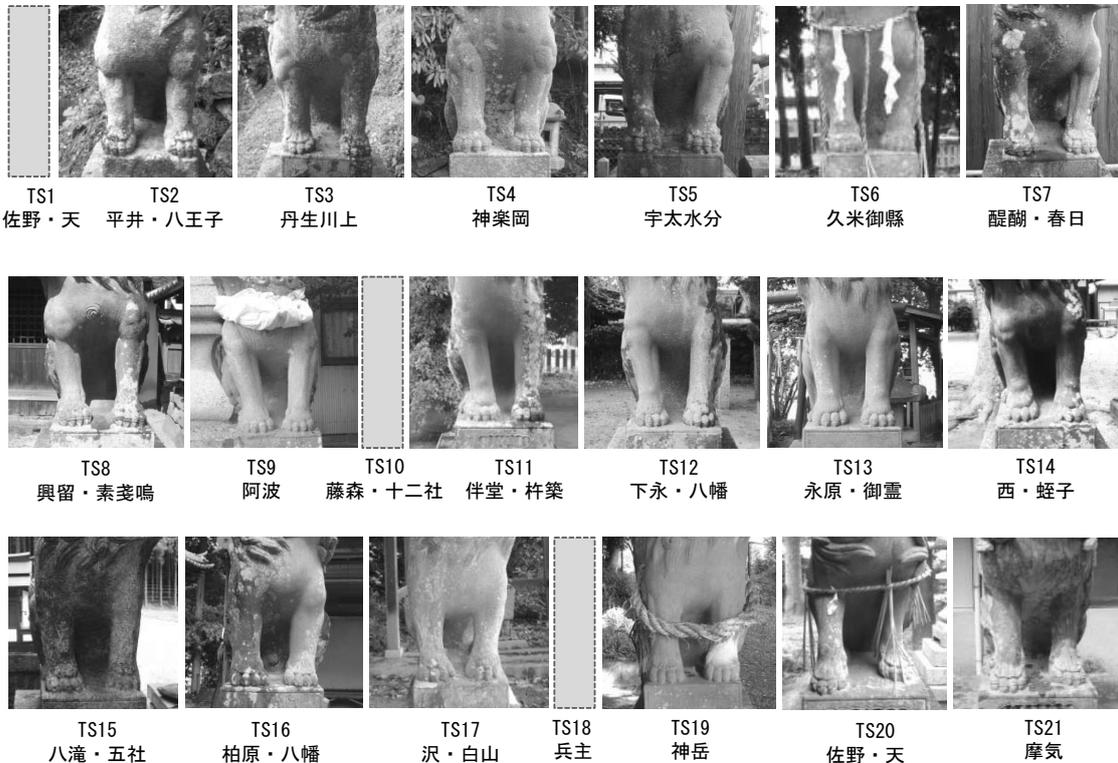


図6 前脚と奉納時期

佐吉の本来の狛犬がわからないものは [] とし、奉納順に並べた。阿波は推定位置である。
TS 4～7と15～19：阿、TS 1～3と8～14：吽

第Ⅱ期



TS8 興留・素菱鳴
安政4年9月
1857

第Ⅳ期



TS9 阿波
不明

第Ⅲ期



TS11 伴堂・杵築
安政6年4月
1859

第Ⅲ期



TS13 永原・御霊
安政7年・万延元年3月
1860

第Ⅲ期



TS14 西・蛭子
万延元年9月
1860

第Ⅳ期



TS15 八滝・五社
万延元年月不明
1860

第Ⅲ期



TS16 柏原・八幡
文久元年5月
1861

第Ⅳ期



TS17 沢・白山
文久元年12月
1861

図7 TS 8から TS17までの前脚と奉納時期
阿波は推定位置である。TS12はその前後と大きく異なるので省いた。上：阿、下：畔

ばらず、肩のつけ根の関節がそれほど目立たないようになる。これも尾による分類とは関係がなく、時間の流れに沿っている。阿波を4の結果から、TS 8興留・素戔鳴のすぐ後に置いてみたところ特に違和感はない。TS15八滝・五社で明瞭になる脚と胸の柔らかな感じは、TS11伴堂・杵築から雰囲気を漂わせ始める。しかし、その流れの中にあるTS14西・蛭子の脚は特に骨ばっており、流れに逆らっているようである。この脚を見ると、阿波の位置はTS14西・蛭子の前後でも良いように見える。ただ、図6では、各狛犬で阿波のどちらかを使っているので、さらに詳しく見るために、問題の時期の狛犬について、阿波共に比べてみよう（図7）。

TS14西・蛭子は、畔の足ではかなりいかつく肩の関節も大変目立っているが、阿では柔らかく、TS15八滝・五社以降にそのままつながっていくと見ることができる。一方、阿波は、第Ⅲ期の脚（図7 TS11、TS13、TS14、TS16）よりもかなりTS 8興留・素戔鳴によく似た強い脚である。脚で見る限り、阿波は全体の流れの中にあり、TS14西・蛭子の畔の脚が全体の流れから逆らうように特別にいかつくとみる方が妥当である。TS14西・蛭子は、全体像でも妙にアンバランスで（付図3、磯辺⁶¹）、佐吉らしくない。畔の前脚も、肩の関節が出過ぎており、初めの頃のTS 2平井・八王子のあたりに匹敵するくらいである。

銘と前脚の比較により、阿波はTS 8興留・素戔鳴の直後と結論する。以下、阿波にTS 9を付ける。

6. 第Ⅳ期についての再考察

最初に佐吉の狛犬を分類した時、第Ⅳ期の狛犬は、第Ⅲ期最後のTS16柏原・八幡が終わってから作り始めたタイプと考えていた。しかし、TS15八滝・五社の発見によって第Ⅳ期の狛犬はTS16柏原・八幡の前に既に作られていることがわかった。さらに今回、TS 9阿波によってもっと早く、第Ⅲ期狛犬開始前、第Ⅱ期の最高峰TS 8興留・素戔鳴のすぐ後に作られたという推論がなされた。

第Ⅰ期から第Ⅱ期に入る時、さらに第Ⅱ期から第Ⅲ期に入る時、いずれも移行の狛犬がある。つまり第Ⅰ期から第Ⅲ期までは試行錯誤があり、一足飛びにはいかない工夫と努力があった。ところが、第Ⅱ期から第Ⅳ期へは移行期の狛犬がない。つまりその必要がないくらいの変化であったといえるだろう。実際第Ⅳ期の形は、TS 8興留・素戔鳴の尾の正面に渦をつくるという変化だけであって、本質は第Ⅱ期のままである。よってこれは第Ⅱ期の変形と呼んでもいいくらいである。

TS 9阿波はTS 8興留・素戔鳴の隣の村にあって、実に近い場所にある。さらにTS 9阿波の変わった特徴は、狛犬よりも台座にあると言える。多くの場合台座は花崗岩でできているが、ここでは台座も狛犬と同じ砂岩で、佐吉がよく使う高級な和泉石である。ところが台座によくある「奉獻」も「氏子中」のような奉納主体名も、世話人の名前も無いのである。さらに珍しいのは、奉納年月を阿の台座正面（拝観者側）に彫ってあることである。普通、台座の正面には「奉獻」や「紋」が彫られて、年月は反対側か尾側にある。奉納年月が正面にある例を他に知らない。おそらくめったに無いのではないだろうか。これはどうしたことだろう。

佐吉の足取りを見ると、TS 1佐野・天の後しばらくしてから、主に大宇陀で仕事をし、多くの石造

物を残している（表1、磯辺²⁾）。その後、師であり育ての親であった難波金兵衛伊助の病気の知らせを受けて、帰郷する⁴⁾。そして恐らく伊助の死を見届けて故郷から帰ってきた佐吉は大坂に腰を落ち着けることになる。ここで大変美しい上山家狐を、続いてTS 8興留・素浅鳴を力一杯作っている。

佐吉の狛犬はよくある狛犬の形をとらず、基本的に特別なものである。実際に高価であることは、TS 8 柏原・八幡狛犬奉納に関する上山家の覚書に金額が残されているのでわかる¹⁾。また文字は彫るのが難しいらしく、同じ覚書に、狛犬代とは別にかなり高額な文字の彫り代が支払われていることが記されている。一方で、佐吉は恩のある人へ石造物を作って贈ったり、あるいはよく安価に作っていたとの証言がある¹⁾。

TS 阿波に関して言えば、TS 8 興留・素浅鳴が奉納される運びになった後すぐに、すぐ隣の村に対しても、尾に少し工夫をこらしただけの小型のもの（TS 阿波）を作ったことになる。さらに台座には、年月が彫られた形跡があるだけで、その他の文字はない。TS 9 阿波の狛犬は、この時の佐吉にとって難しいものではなく、おそらく村人のために特別安価に簡便に作ったものと考えられる。何か義理があったのか、よんどころない必要が生じたのであろう。

想像を逞しくすると、予算も少ないことから、佐吉は、「奉獻」その他の文字は地元の石工の手で彫るようにとでも言って、台座の石を狛犬のおまけにしてあげたのではないだろうか。そこに彫られている「年月」を佐吉が彫ったかどうかは不明であるが、正面にあるということで、とりあえず佐吉のものかもしれないと考えておこう。ところがすぐそばにあるTS 8 興留・素浅鳴の「奉獻」は、佐吉の最高峰である^{1)、2)}。力強く、彫りの深さは佐吉の中でも一番で、他に例を見ない出来栄である。それを見て、TS 9 阿波の狛犬を設置した地元の石工がここに「奉獻」を彫ることを遠慮したのではないだろうか。そして佐吉の「年月」に敬意を表して正面に据えたと考えてはどうだろう。

この時をもって、気軽に簡単に安価にサービスで作るような場合、佐吉はこのタイプを作るようになったと考えられる。しかし、佐吉は、TS 9 阿波の後、移行期を経て新たな狛犬の創造へ向けて一路邁進していく。第Ⅲ期である。佐吉は新たな狛犬を求めて努力し続け、故郷の恩人のために作るTS16 柏原・八幡の見通しが立ってきた時に、TS14 西・蛭子とTS15 八滝・五社を作るのである（詳細は磯辺^{2)、3)、5)、6)}を参照されたい）。妙にアンバランスな、尾だけは新たな形をほぼ完成しているTS14 西・蛭子と、気軽なタイプの二番目であるTS15 八滝・五社である。つまりここでも何かよんどころない求めがあったのだろう。TS16 柏原・八幡の製作に向けて急ぐ中で、TS14 西・蛭子では彫り始めの形取りを弟子にさせたのかもしれない。弟子は、全体をTS 8 興留・素浅鳴にならって作ろうとしたが、妙な具合になってしまった。この狛犬のアンバランスさはそのように考えるより他ない。そしてそのまま制作を続け、細かい所の彫りは佐吉が行い、また尾の作りも新たな試みで進めたと見られる。続けてTS15 八滝・五社では、さらに簡単なTS 9 阿波のサービススタイルで作ったものと見られる。

大きな課題だったTS16 柏原・八幡の後、佐吉は次の舍利尊勝寺の石仏に向けて努力を始めるようになる³⁾。しばらく尾に渦が半円形に並ぶ気軽な狛犬（第Ⅳ期のスタイル）を作って、必要な所にあげたりしながらの作業と思われる。この時期の石仏かもしれない石仏群が、三重県関町観音山にあることが知られている¹⁰⁾。ただ、もっと早い時期とも言われており¹⁰⁾ 時期は確定しない。

第Ⅲ期の後、「丹波佐吉の石造物とその一生」³⁾の中では、大和あたりで苦悶しながら舍利尊勝寺の

ために石仏を模索していたのではないかと考えた。しかし、もしも関町石仏をこの時期に作っていたとすると、大坂で、次々と石仏を作っていたのかもしれない。舍利尊勝寺の役の行者像は技巧の限りを尽くしており、関町観音山の石仏を見ると、それに向けて技巧を磨いていたようにも見える。しかし、病気がやってくる。その後は、上記論文³⁾に書いたとおりで、実際の役の行者像は、技巧だけではなくそれまでの佐吉の石仏を超えたものを作るに至ったと考えられる。

7. おわりに

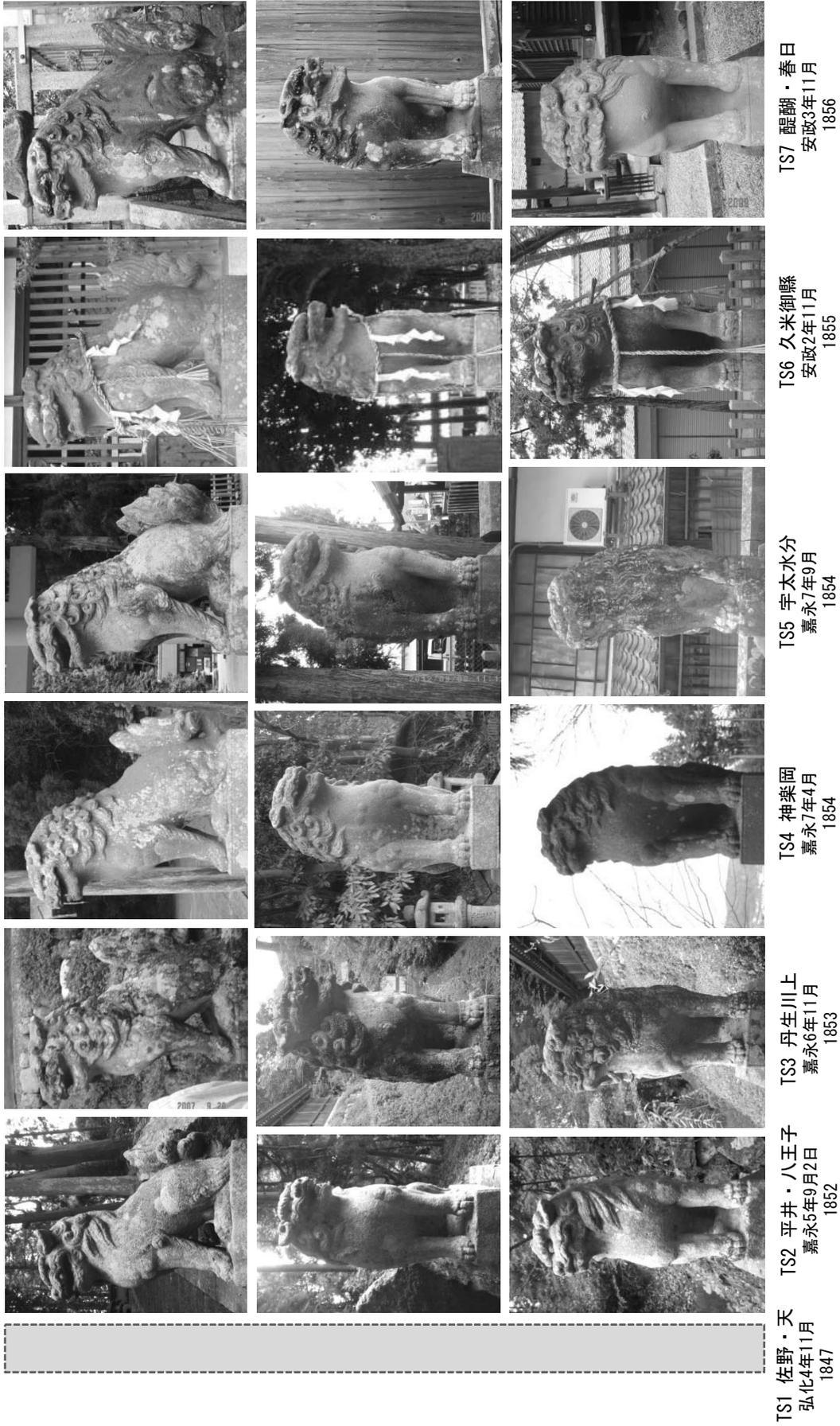
佐吉の既知の狛犬について、ほぼ全体を整理することができた。今後新たな狛犬が発見されるとすれば、最初の弘化4年(1847)から大宇陀時代嘉永5年(1852)までのものと予想される。佐吉の狛犬を観察する中で、彼の努力の道筋をたどるのは、大いに力づけられることであった。しかし、現在そのうち2件が平成に再建されている。幸い佐吉による元の狛犬にならう努力がされているので、元の姿を想像することができる。佐吉の狛犬のほとんどは石造とはいえ砂岩製のため、元来壊れやすいものである。地元の方々が、気付かずに普通の平成狛犬に変えることが起こる可能性もある状況である。佐吉について、より知られ、各地で大切にされることを切に望んでいる。

8. 謝辞

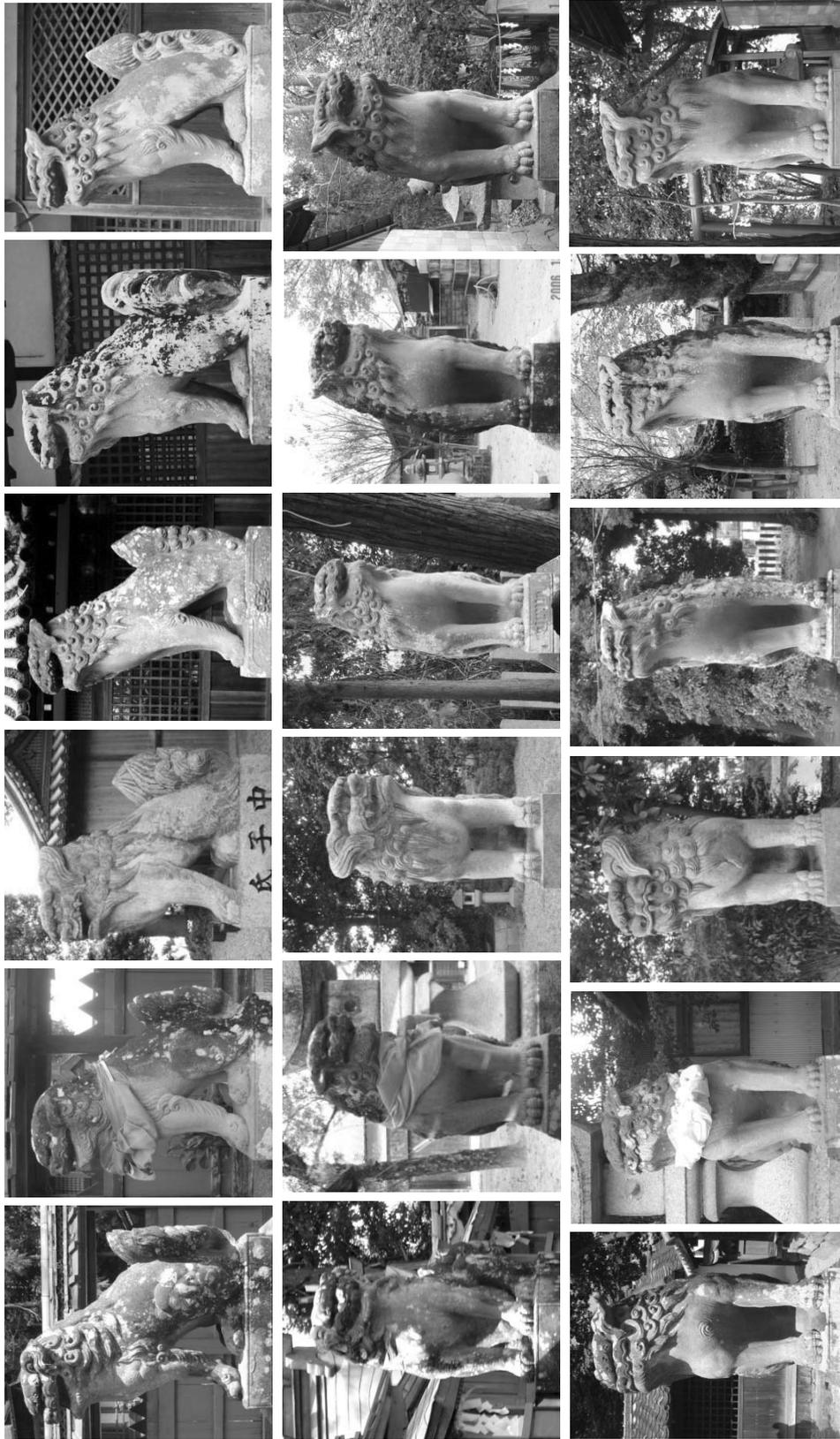
奈良県大和郡山市松尾寺千手観音および三重県関町観音山石仏に関して、「奈良石仏会」杉本佳代子氏、亀山幸治氏、竹市信一郎氏には様々な情報をお知らせ頂き、特に杉本氏には貴重な文献のコピーを頂いただけでなく、ご夫妻で観音山の現地につれて行って頂いた。それらについて、本稿では簡単に述べるだけであったが、大きな収穫だった。ここに深く感謝する。

引用文献

- 1) 磯辺ゆう(2007)丹波佐吉の狛犬1-記載. 奈良文化女子短期大学紀要38:19-30.
- 2) 磯辺ゆう(2007)丹波佐吉の狛犬2-考察. 奈良文化女子短期大学紀要38:31-42.
- 3) 磯辺ゆう(2008)丹波佐吉の石造物とその一生. 奈良文化女子短期大学紀要39:1-38.
- 4) 磯辺ゆう・小寺慶昭(2009)丹波佐吉の新発見狛犬-醍醐・春日神社. 奈良文化女子短期大学紀要40:29-39.
- 5) 磯辺ゆう(2010)丹波佐吉の狛犬再記載-八滝・五社神社. 奈良文化女子短期大学紀要41:23-34.
- 6) 磯辺ゆう(2011)丹波佐吉の狛犬新記載-西・蛭子神社. 奈良文化女子短期大学紀要42:27-40.
- 7) 磯辺ゆう(2012)丹波佐吉の狛犬再記載-佐野・天神社. 奈良文化女子短期大学紀要43:41-55.
- 8) 奈良文化財同好会(1999)狛犬の研究-大阪府の狛犬-. 165pp. 奈良文化財同好会.
- 9) 仲芳人(1989)石工・丹波佐吉の大和での作品Ⅲ. 日本の石仏49:73-75.
- 10) 石仏の辻 <http://sekibutuwalk.blog99.fc2.com/blog-category-44.html>
- 11) 金森敦子(1988)旅の石工-丹波佐吉の生涯. 274pp. 法政大学出版局.



付図1 TS1からTS7(第I期から第II期途中)まで



TS8 興留・素戔鳴
安政4年9月
1857

TS9 阿波
不明
1858

TS10 藤森・十二社
安政5年12月
1858

TS11 伴堂・杵築
安政6年4月
1859

TS12 下永・八幡
安政6年9月
1859

TS13 永原・御霊
安政7年・万延元年3月
1860

付図2 TS8からTS13(第II期最後から第IV期をはさんで第III期中)まで



TS14 西・蛭子
万延元年9月
1860

TS15 八薄・五社
万延元年月不明
1860

TS16 柏原・八幡
文久元年5月
1861

TS17 沢・白山
文久元年12月
1861

TS18 兵主
文久2年11月
1862

TS19 神岳
文久3年9月
1863

付図3 TS14からTS19(第Ⅲ期途中から第Ⅳ期最後)まで



TS21 摩気
不明



TS20 佐野・天
不明

付図4 TS20からTS21(第V期)

